

伊勢物語『さらぬ別れ』 定期テスト対策問題（解答・解説編）

解答・解説

1. 現代語訳

1. たびたび（母のもとへ）参上することができない。「しばしば」は「たびたび・何度も」。「え……ず」は不可能を表し、「え参で（まうで）ず」で「参上することができない」。「まうづ」は「参上する」（行くの謙譲語）で、ここは身分の高い母のもとへ訪れることをいう。
2. たいそういとおしくお思いになって（かわいがって）いらっしゃった。「かなしうす」は「かなしくす」のウ音便で、「かわいがる・いとおしむ」の意。古文の「かなし」は「いとおしい・かわいい」で、「悲しい」ではない点に注意。「給ふ」は尊敬の補助動詞で、母に対する敬意を表す。
3. （私も）年をとってしまったので、避けることのできない別れ（＝死別）があるというから、まします会いたいと思うあなたですよ。「老いぬれば」は「老ゆ＋ぬ（完了）＋ば（已然形＋ば＝順接確定条件）」で「年をとってしまったので」。「見まくほし」は「会いたい」、「君」は子（男）を指す。死期が近づくほど、いっそう子に会いたいという母の歌。
4. この世の中に、避けることのできない別れ（＝死別）などなければよいのになあ。（親に）千年も生きてほしいと祈る、子のために。「なくもがな」は「なくあつてほしい→なければよいのに」という願望。「千代もと祈る」は「千年も（生きてほしい）と祈る」。死別がなければよい、親に長生きしてほしいと願う、子の返歌。

2. 文法・敬語

5. 「なむ」は係助詞（強意）。係助詞「なむ」を受けて、係り結びの法則により文末が連体形「ける」になっている。「母なむ宮なりける」は「母は（ほかでもなく）皇女であった」と強調する言い方。係助詞「なむ」は連体形で結ぶので、過去の助動詞「けり」が連体形「ける」となっている。
6. 不可能（～することができない）の意味。副詞「え」は、下に打消の語（ず・じ・で など）を伴って「～できない」という不可能の意を表す。「えまうでず」＝「参上することができない」。
7. 「まく」は、推量の助動詞「む」のク語法（「む」＋接尾語「く」）で、「～(し)ようとする」「～(する)こと」を名詞化したもの。「見まくほし」は「見ること＋ほし（希望）」＝「見たい・会いたい」。ク語法はほかに「言はく」「思はく」などがある。
8. 「もがな」は願望を表す終助詞で、「～があればよいのに・～であつてほしい」の意。「なくもがな」は形容詞「なし」の連用形「なく」＋「もがな」で「(さらぬ別れが) なければよいのになあ」。実現しにくい事柄への願望をこめる。

3. 語句

9. 「いやし」＝（身分が）低い・卑しい。「さらぬ別れ」＝避けることのできない別れ。＝死別のこと。「身はいやしなから」は「（男自身の）身分は低いけれども」。「さらぬ」は「避ら（さら）ぬ」で「避けられない」、「さらぬ別れ」は死別の婉曲表現。

10. 「さへ」＝（添加）～までも。「一つ子にさへありければ」で「（その上）一人っ子でさえあったので」。母の愛情が深い理由として、一人っ子であることが付け加えられている。

11. 「とみのこと」＝急な用事・急ぎの用件。「とみ」は「頓（とみ）」で「急なこと」。「とみのこととて御文あり」は「急ぎの用事だといって、お手紙がある」。

4. 内容理解

12. 「宮」は皇女（天皇の娘）を指す。母が皇女である一方、本文冒頭で男自身の「身はいやし（身分は低い）」とあることから、この男は、母方は高貴な血筋でありながら、自身の身分は低いという境遇であることがわかる。父方の血筋によって本人の身分は高くなく、母だけが皇女という設定。

『伊勢物語』では主人公を在原業平に擬し、母を伊都（いと）内親王とする説がある。

13. 「人の子」は、この歌を詠んだ子自身（男＝子）を指す。「千代もと祈る人の子のため」＝「親に千年も生きてほしいと祈る、子であるこの私のために」。親の長寿を願う子（人の子）の立場から詠んでいる。

14. 母の歌は、自分が老いて死別の時が近づいたからこそ、いつそう子に会いたいという、わが子への思慕の情を詠む。一方、子の歌は、その死別などこの世になればよい、親には千年も生きてほしいと、親の長寿を願う情を詠む。母は「会いたい」と自らの願いを述べ、子は「別れが来ないでほしい・長生きしてほしい」と相手（親）の無事を願っており、同じ「さらぬ別れ」をめぐりながら、向き合う相手への深い愛情が互いに詠み交わされている。母＝死を前にして子に会いたいという思い、子＝親の死別を否定し長寿を祈る思い。立場は違っても、たがいを思いやる親子の情愛で響き合っている。

5. 文学史

15. 歌物語。主人公とされる実在の歌人＝在原業平。『伊勢物語』は平安時代前期に成立した歌物語で、和歌を中心に「むかし、男ありけり」と語り出される章段を連ねる。主人公の「男」は六歌仙の一人・在原業平に擬せられている。同種の歌物語に『大和物語』『平中物語』がある。